

批評的な読みの交流を通して、個の読みを広げ深める子ども

— 中学2年「走れメロス」の実践から —

1 単元のねらい

様々な角度から作品を読み取ることで、作品の構成や表現の工夫に気付き、作品のもつ魅力について考えを広げ、深めることができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本学級の生徒はおおむね積極的に国語の学習に取り組んでおり、朝読書や休憩時間には進んで読書をする姿も見られる。ただ、読んでいる本の多くはマンガや映画の小説版、占いの本や有名人のエッセーなど平易なものが多く、国語の学習についても苦手意識をもつ生徒が少なくない。基礎知識を問う発問には積極的に反応するが、登場人物の心情や文章の内容については考えの表出を渋る傾向があり、文章の読み取り方に自信をもてずにいることがうかがえる。

次は、星新一のショートショート作品「ボウシ」を授業で扱った際の初発の感想である。

- ・宇宙人は老人の大切な帽子をうばってしまって、少しひどいなと思いました。(生徒A)
- ・ミューラ星人が、老人が奇術師だと知らずに帽子から何でも出てくると勘違いしているところが面白いです。地球でのエメラルドの価値も分かっていなくて、老人はびっくりしたと思います。(生徒B)
- ・宇宙人と人間の考え方や価値観の違いが目に見えておもしろかったです。宇宙人はボウシを持って帰ってどうするのか、わざと最後まで書かずに読んだ人に想像してもらおうのだと思いました。(生徒C)

「ボウシ」の内容は、老奇術師が唯一得意とする手品を見た宇宙人が、手品の道具である帽子を何でも生み出せる装置と勘違いして奪い、代わりに別の星で拾ったボール大のエメラルド(別の星に多数あるため、宇宙人にとってはただの石ころ)を置いて立ち去る、というものである。

生徒Aには登場人物の心情に共感する姿、生徒Bには勘違いを純粋に楽しむ姿が見られる。一方、生徒Cは価値観の差や結末の表現に注目し、読者を引き込む意図的な工夫の存在を見いだしている。このように、同じ作品を読んでも、これまでの生活体験や読書生活の違いもあり、個々の読み取り方は大きく異なる。そこで、続けて星新一の作品「博士とロボット」を読ませ、気付いた点を交流させた。「博士とロボット」は、文明が発展途上の星に対して、博士が自作のロボットによって様々な支援を行ったら、星の住人は博士ではなくロボットに感謝した、という話である。次は、前述の3人の生徒の交流後の感想である。

- ・比べてみると、似ているところがいろいろあるんだと思いました。意外な展開ですごくおもしろいし、最後まで何があるかわからないと思いました。(生徒A)
- ・1回目の感想では面白いととらえていましたが、考えが変わりました。文明が進んでいて調子に乗っていると痛い目にあうということを作者は伝えたかったのではないかと、ということです。(生徒B)
- ・宇宙人と人間の考え方を描くことで、星さんは「人はみんな違う意見をもっている」ということを伝えたかったのではないかなと思いました。(生徒C)

2作品に共通した構成や表現、比較することで新たに見いだした主題など、着眼点やとらえ方は異なるが、いずれの生徒も作品単体では気付きにくかった別の読み方を知り、読みを深めようとしている姿がうかがえる。そこで、得た読みを互いに交流することで、自己の読みに他者の読みを取り入れるプロセスが成立し、個の読みがより確かに構築されていくと考えた。

(2) 本単元の内容と国語科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校園国語科では、「読むこと」の学習を通してものの見方や考え方を広げ、深めながら、子ども自身が自己の変容をとらえる機会を大切にし、よりよい言語生活や社会生活を送ろうとする子どもの姿を目指している。

中学2年生という発達段階と生徒の現状を踏まえたとき、文学的文章を読む際には、登場人物の関係や心情のみならず、文章そのものの構成や舞台設定、様々な表現の工夫などにも意識を向け、工夫の背景にある作者の意図についても考えを巡らせるなど、批評的な視点を含めた様々な読みの視点から作品を読み味わう姿勢を身に付けさせることが求められる。そこで本単元では、読み比べを通して構成や表現など多面的な視点から作品を読み取り、作品のもつ魅力について考えを深めることをねらいとした。

教材には、「走れメロス」を取り上げた。生徒の認知度でも群を抜く著名な作品だが、ドラマチックなストーリー展開に加え、情景・心情描写の豊かさ、誇張された巧みな比喩表現、躍動感のある特徴的な独特の文体など、構成や表現面の工夫に満ちあふれている魅力的な作品である。また、友情・信頼、善悪、人間の強さや弱さ、人間の成長過程など、主題についても多様な解釈が可能であり、生徒が日常数多く触れている平易な文章とは一線を画した、読み応えのある作品であることも考慮した。

本単元では、心情や人物像を読み取ること、読み比べによって多面的に作品を読み込むことの二つを軸に据えて単元を構成した。前者では、難解な語句や言い回しと生徒の読みの現状を踏まえ、話の展開に沿う形で心情や人物像を丁寧に読み取ることが意図した。そして、その読みを後者の学習を通して問い直し、作品の魅力について自分なりに考えを形成することを通して、批評的な読みの下地を固め、中学3年の学習につなげていくことを目指した。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

単元の展開に際して、授業の各段階で生徒がその時点での自己の読みを自覚し、授業の進展とともにその読みが随時更新され、広がり、深まっていく、という営みを重視したいと考えた。そこで、生徒の発言を教師が効果的につないで授業内での課題解決を目指すことはもちろんだが、個々の考えを記述したものを随時提出させることで、生徒の読みの状況を教師が把握し、その後の授業の展開に生かせるように心がけた。

第2次では、作品が六つの場面から構成されていることを確認した後、登場人物の心情や人物像について読み取っていった。具体的には、まず1～2場面では暴君ディオニスを主人公メロスに対する対役と位置付け、二人の対立の構図に注目して人物像を把握した。次いで3～4場面ではメロスの心情の変化を心情曲線を活用して視覚的にとらえる学習活動を設定し、読みの焦点化を図った。5～6場面では、メロスとディオニスの人物像の変化を、1～2場面の記述と改めて比較することでとらえた。

単元の中核となる第3次では、ここまで心情や人物像中心に形成されてきた個々の読みに、読み比べによって揺さぶりをかけ、より多面的に再構築していくことを目指した。読み比べには、作品の原典とされるシラーの詩「人質 譚詩」(教科書指導書所収)を用いた。この詩と比較することで、「走れメロス」には冒頭の状況設定、ディオニスについての設定や描写、妹の結婚式の場面、メロスが走るのを断念し一人語りをする場面、メロスとセリヌンティウスの殴り合いの場面など、多くの加筆点があることを自力で見いだすことができると考えた。

また、ここでは、表1のような「小説の魅力にせまる10個のヒント」を提示した。多面的な読み取り方の指針を共通言語として得た上で、加筆によってどのような魅力が加わったのか、という課題と向き合うことで、構成や表現上の工夫、作者の表現意図や作品の主題などにおのずと目が向き、

これまでの学習をいかしてより多面的に読みを深めることが可能になると考えた。

学び合いの場面（第9時）では、加筆部分の内容を根拠として自分の考えを形成していくため、なぜそう思ったかという理由について掘り下げるはたらきかけを重視した。また、他者の読みに触れることで自己の読みを広げ、深めていくために、活発な読みの交流を促すとともに、特に主題については多様なとらえ方が可能なため、あえて読みを一つに収束させず、それぞれの読みのよさを認めるはたらきかけも大切にした。

表1：小説の魅力にせまる10個のヒント

- | | |
|---------|-----------|
| 1. 登場人物 | 2. 設定 |
| 3. 構成 | 4. 題名 |
| 5. 視点 | 6. 表現技法 |
| 7. 工夫 | 8. 作者と他作品 |
| 9. 主題 | 10. 批評 |

(新潟大学教育学部附属長岡中学校の研究実践より)

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	学習材を通読する。	1	・全文を通読し、初発の感想をもつ。
2	登場人物の心情や人物像を読み取り、その変化をとらえる。	2・3 4・5 6	・登場人物と場面構成を確認する。 ・1～2場面を読み、メロスと王の人物像を読み取る。 ・3～4場面を読み、メロスの心情の変化を読み取る。 ・5～6場面を読み、メロスと王の人物像の変化を読み取る。
3	原典の詩と読み比べ、作品の魅力について考える。	7・8 9 10	・「人質 譚詩」と「走れメロス」を読み比べ、相違点を整理する。 ◇加筆によって生まれた魅力について話し合い、読みを広げ深める。 ・互いの感想を交流し、単元全体の学習を振り返る。

4 授業の実際

(1) 学び合いへ向けてのグループ編成

生徒は、国語や他教科のグループ学習において、4人または5人の生活班を母体とした話し合いを多く経験している。だが、本単元では、生徒個々の特性や日頃の人間関係を考慮しつつ、個々の読みの状況に応じて意図的にグループを編成することで、生徒が試行錯誤しながらも自分たちの手で読みを変化・深化させていけるようにすることを目指した。つまり、グループ編成そのものが、学び合いを活性化させるための重要なはたらきかけの一つであるとも言える。

実際のグループ編成においては、学び合いの前時（第8時）において、詩から小説に書き換えることで生まれた魅力について、自分はどう考えるか、またそれは「小説の魅力にせまる10個のヒント」のどれにあてはまるかを端的に記述させ、図1のようにグループを編成した。

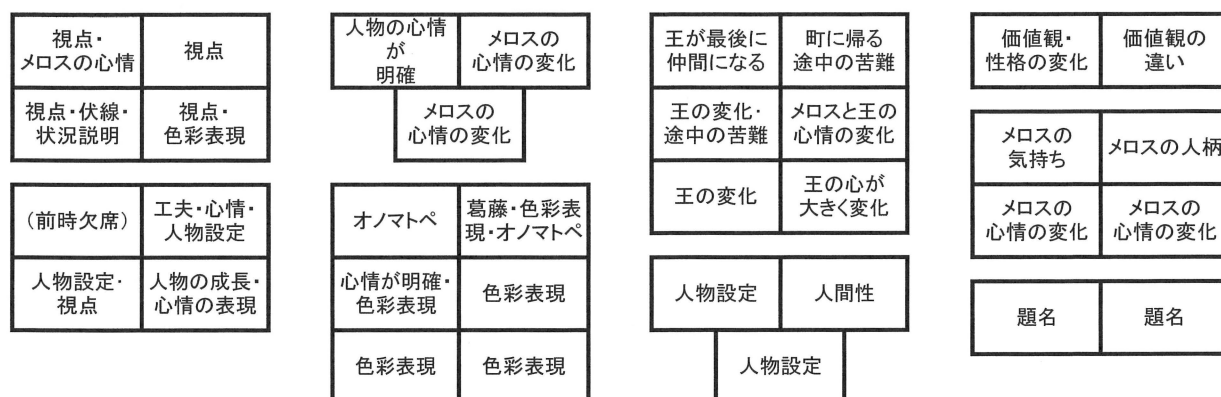


図1：記述をもとにしたグループ編成

自己の読みに自信をもてない生徒が多い現状と、似た魅力を異なる根拠をもとにとらえているケースが多かったことを踏まえ、似た魅力を取り上げた生徒同士が根拠を検討し合う中で読みを強固にし、その上で他グループの読みに触れることで再度読みを揺さぶることを目指した。

(2) 学び合いの実際

ここでは、価値観に着目したグループ（生徒D・E）の学び合いの様子を取り上げる。次に示すのは、前時段階での二人の読みについての記述である。

- ・私は、登場人物の考え方や価値観、性格の移り変わりが魅力だと思いました。メロスは「邪悪に対しては人一倍に敏感」「単純な男」と書いてあった。でも、王城に戻るときにメロスの心はずたずたになって、考え方がディオニスに近づいていると思いました。ディオニスも、最初人のことを信じるができなかったけれど、6場面の最後で「仲間の一人にしてほしい」とあったから、最終的には人を信じるができたと思いました。10個のヒントでは、1の「登場人物」だと思いました。（生徒D）
- ・価値観を共有するところが魅力（「登場人物」）。主人公と対役を正反対の人物像にすることで、ぶつかり合いのおもしろさや、最後には分かり合えるという感動が生まれると思いました。詩の中にはない価値観の違いが多く出されることで読者をより引きつけられたと思います。（生徒E）

価値観という着眼点は共通言語として十分活用できるが、 部のように、前時段階ではとらえ方に微妙なずれが見られた。そこで、このずれを手掛かりに学び合いを活性化したいと考えた。実際の学び合いの際には、ホワイトボード上に話し合った内容の要点を記述させ、それを使いながら次のようにはたらきかけを行った。

- 生徒D：10個のヒント、何にした？
生徒E：登場人物。
生徒D：同じ。
T 1：目の付け所はどこ？
生徒E：価値観を共有している。
生徒D：価値観の移り変わり。
T 2：微妙に違うね。突っ込んで根拠を検討してみよう。
生徒E：価値観が移り変わるのはメロス？
生徒D：ズタズタになっていく。
生徒E：じゃあ、似てるね。
生徒D：（ホワイトボードに「価値観の移り変わり」と記入）…根拠はどうでしょうか？
生徒E：最初は主人公と対役の価値観が全く正反対。それが移り変わったとき、面白さが倍増する。
…二つ目の根拠は？
生徒D：（ホワイトボードに書きながら）メロスが王城に走っていくとき、ズタズタ精神。価値観がディオニスに近づく。
生徒E：これ、ディオニス化だ。メロスは走らないの？ のところでドキドキワクワク感がアップ。
…三つ目は、最後の（ディオニスが）改心するところ。
生徒D：感動！（言いながらホワイトボードに書き足していく）
生徒E：メロスが勝った、メロスがディオニスの心を変えたから感動だよ。かっこいい！
生徒D：じゃあハッピーエンドだ（書き直す）。
T 3：（ホワイトボードを確認して）メロスが変わったときはどこ？
生徒E：メロスがズタズタになって、そこから復活したとき。
T 4：ディオニスが変わったのは？
生徒E：メロスとセリヌンティウスの友情を見て、上がってくる。
T 5：なるほど、上がってくるんだ。…それまではどう？ デイオニスはずっと悪なの？
生徒E：…2年前はいい人だったかもしれないけど、暴君になった。
T 6：ディオニス化のところではどのくらいディオニス化しちゃうの？
生徒D：…。(グラフを描きはじめる)

T2のはたらきかけによって、生徒は互いの着眼点のずれを自覚し、相違点の確認と共通点のすりあわせを意識した学び合いを展開することができた。また、T3・T4・T5・T6のように、ホワイトボードにまとめた内容をより具体的に問い返していくはたらきかけを連続させたことで、心情曲線を活用して心情の変化を視覚的にとらえた第2次の学習を生徒が想起し、価値観の移り変わりをグラフに表すという展開へとつなげることができた。これは、学びをいかすという点でも意義深いものとなった。

グループでの話し合いの後、話し合いの結果をホワイトボードにまとめたものを掲示し、班長がポイントについて発表する形で、読みを学級全体で共有していった。加筆によって生まれた魅力について、「小説の魅力にせまる10個のヒント」の観点で整理したところ、各グループのまとめは次のようになった。

- ・「登場人物」（2グループ）…価値観の移り変わり、善と悪の入れ替わり。
- ・「登場人物」＋「構成」（3グループ）…1場面の詳しい設定とメロスの心情の変化。
- ・「登場人物」＋「視点」（2グループ）…一人称で登場人物になりきって読める。
- ・「題名」（1グループ）…題名によって走る目的が変化。
- ・「工夫」（1グループ）…色彩表現によって状況や気持ちがリアルに伝わる。

学び合いの結果、複数のヒントを組み合わせる魅力を示すグループがある一方、一つのヒントに収束させていったグループも見られた。授業ではここで時間が来たため、生徒のふりかえりの記述から、他グループの読みを得ることで個の読みがどうゆさぶられたかを検討した。次に示すのは、授業後の生徒のふりかえりである。

- ・発表では、みんなに分かりやすいように、グラフも使って発表しました。最終的に私が思った魅力は、やっぱり登場人物の価値観の変化です。メロスが王城へ行くときに、メロスの全てがずたずたになっているときに、ディオニス化しているなど思いました。最初・途中・最後のメロスの価値観が変わっている、そこが魅力だなと思いました。（生徒D）
- ・他の意見も素敵で、人物と構成で多くの魅力があることがわかりましたが、私が書いた価値観が一番魅力的だと思いました。価値観が変化していくところがとてもおもしろかったです。また、Dさんと話し合ってみて、もっと深いところまでおもしろさ考えることができました。（生徒E）
- ・最初は色彩表現が豊かなところが魅力だと思っていました。けれど、発表を聞いて、班によって、取り上げた魅力は同じでも、根拠が違ったりしておもしろいと思いました。他の人の発表を聞いて、走れメロスの一番の魅力は心の葛藤にあると思いました。（生徒F）
- ・最初に読んだときは結構単純な話だと思っていました。ストーリーも王道だし。でも、脇役だと思っていたディオニスの心情の変化とかを話し合ったら、もっと深いおもしろさに気付きました。（生徒G）
- ・僕たちの班では心情の変化が魅力だとまとめたが、全体で意見を出し合うと、僕たちが思いつかなかった視点も出てきた。作者は小説にするとき、オノマトペや様々なイメージを加筆し、何本も伏線を張ったことが分かった。結局、作者は登場人物の人間らしさや心の中を表すために、いろいろと工夫して加筆したのだと思った。（生徒H）
- ・他の班は心情、気持ちが良かったけど、その中にもディオニス目線や価値観などたくさんの意見があって面白かったです。また、題名や色彩表現などを考えている班もあってすごいと思いました。人によって魅力のとらえ方が違うけど、それには正解も間違いもなくおもしろいと思いました。（生徒I）

生徒D・Eは、他グループの読みを得た後も自グループで話し合った魅力を一番に評価しており、取り上げた学び合いや発表の様子から、自分たちの読み取り方に自信をもつことができている様子

がうかがえた。一方で生徒Fは、学び合いの過程で魅力の根拠についての多様性に気づき、作品の魅力についてのとらえも変化したことがうかがえた。なお、このように、魅力のとらえが学び合いの前後で変化したケースは33人中8人であった。また、生徒G・H・Iは、魅力についてのとらえ自体はあまり変化していないが、学び合いの課程を経ることで読みが深化したことが記述からうかがえた。特に、生徒Hの記述に見られる作者の表現意図について考える姿勢や、生徒Iの記述に見られる魅力のとらえ方の個人差を積極的に受容する姿勢は、本学校園国語科が目指す豊かな学びの姿に通じるものだと考えた。なお、このように、学び合いによる読みの深化が確認されたケースは33人中22人であった。表2に示すのは、学び合いの場面の評価の結果である。

表2：学び合いの場面の評価基準と実際の評価

学習活動	学習活動における具体的な評価基準	評価資料	評価基準		
			A	B	C
読み比べによって見いだした相違点を根拠に、加筆によってどのような魅力が加わったかについて話し合う。	根拠をもとに、他者の読みを取り入れながら作品の魅力について考え、自分の言葉で表現している。	発言ノート	既習内容や加筆部など複数の根拠に他者の読みを加えて自分の考えを形成し、作品の魅力について述べている。	既習内容や加筆部を根拠に自分の考えを形成し、作品の魅力について述べている。	他者の読みを加えず、根拠が曖昧なまま作品の魅力について述べている。
評価人数（33人中）			17人	13人	3人

このように、他者の読みに出会う学び合いの過程を経ることで、多くの生徒が個の読みを揺さぶられ、読みに広がりや深まりが生まれていることが確認できた。

5 成果と課題

この実践での成果としては、まず、読みの状況を把握した上で意図的にグループを編成することで、学び合いのコーディネートと活性化が図れたこと、また、心情曲線や「10個のヒント」など、様々な角度から作品を読み解くための方略を単元の中で提示することで、生徒が自分なりに方略をいかして課題に取り組む姿が見られたことが挙げられる。

ただ、「10個のヒント」については、今回初めて生徒に提示したものであり、十分に活用しきれていない生徒も見受けられた。また、9グループ中7グループでヒント1「登場人物」を取り上げる形に収束したのは、読みを揺さぶる前段階である第2次の展開が人物像と心情中心の展開であった点が影響したことは否めない。ヒントを文章を読み解く方略として真にいかす学びを成立させるためには、ヒントを用いて文章を読み解く実践を繰り返し積み重ね、生徒が自信をもってヒントを使いこなせるようにしていく必要がある。

また、グループ編成については、魅力のとらえの共通点を重視したために2～6人での編成となり、主に6人グループで学び合いが活発になりやすかったことが指摘された。9グループが同時進行で学び合う状況では、教師が介入できるタイミングはおのずと限られてくる。授業協議でも話題になったことだが、グループへのはたらきかけだけでなく、全体で読みを共有する段階で学び合いがより活発に成立するためのはたらきかけの在りようについても検討していく必要を感じている。

（文責 籠橋 剛）